

パネルディスカッション「水の魅力でまちを元気に」

知事) ここからは、パネルディスカッション「水の魅力でまちを元気に」です。

神奈川は、水が非常に豊かなところ。水というキーワードで考えていくと、魅力がいっぱい出てくる。水の魅力を、それぞれの「まちおこし」につなげていきたい。今日はパネリストの皆様から、さまざまなアイデアが出てくると思います。神奈川の水の魅力をさらに高めていくためにどうすればよいか、ヒントになるような議論をしていきたいと思います。

はじめに、お一人お一人からプレゼンテーションをしていただきたいと思います。まず、慶應義塾大学経済学部の岸先生をお願いします。

岸) 私のプロフィールでは、小網代の活動、鶴見川の活動をご紹介いただいておりますが、今日は鶴見川の話をしてします。

水というと、きれいな水が良くて、鶴見川は汚いから良くない水、良くない川だというイメージが一般的ですが、実は、都市の川でも、市民や子どもたちを地球につなぐ、地球を楽しみ、地球を再発見する、という極めて重要な役割を果たしている川です。市民と行政の連携で水辺のふれあいが進む都市河川が、鶴見川なのです。

鶴見川は、上流部は東京都町田市、中下流部は川崎市・横浜市、東京と神奈川にまたがる一級河川です。この川に雨水の集まる流域の外形が動物のマレーバクの形に似ているので、「流域はバクの形」が合言葉になっています。

皆さんの中には、鶴見川には自然なんか無いと思っている方も多いと思いますが、上流から順に鶴見川を紹介します。鶴見川の最源流、町田市と八王子市、多摩市の境、町田市が一番てっぺんから東に約8キロ、幅1キロの雑木林が続く1000ヘクタール近くの巨大な雑木林が、鶴見川の水源地です。はるか彼方に天気がよければ房総半島が見えて、東京湾が見えて、鶴見川の河口、大黒町の東京電力の天然ガス発電所の巨大な煙突2本が見えます。

中流の新横浜では、小机城址も見えて、84ヘクタールの鶴見川多目的遊水地とその周囲に、広々とした景色が広がります。鶴見川多目的遊水地は、国土交通省と横浜市が共同管理していて、川が大増水したときに390万トンほどの水をためて、下流域を水害から守るための構造物です。

鶴見川から一番近い街である綱島から上流を見ると、広々とした高水敷（※常に水が流れる低水路より一段高い部分の敷地で、洪水時は冠水する。）が広がります。綱島では、地元の人「バリケン島ビオトープ」をよく知っていて、子どもたちがたくさん水辺の遊び、学習に来るところでもあります。

鶴見川の地理上の河口ですが、今は埋め立て地が2キロほど延びて、そこに先ほどの東電の煙突があります。自然の河口は横浜市鶴見区生麦です。「貝の浜」とも呼ばれていて、きれいな光景です。

鶴見川には、実は普通の人々が考えているより、はるかに一杯生き物がいます。淡水魚、汽水魚あわせて50~60種類くらい普通に見つかります。先ほど、さかなクンのお話にも出てきましたが、新横浜で私が投網で捕まえたのは20センチくらいの大きい鮎です。

ウナギもたくさんいます。今、ウナギの資源が不足と大騒ぎしていますが、日本の都市河川でウ

ナギを養育するのは、極めて簡単なはずですから、補助金を出して都市河川をウナギの養育所、獲って食べるのではなくて卵を産みにマリアナ海溝まで行ってもらうための川にするのが良いと思います。

また、さかなクンのお話に出てきたマルタウグイのほか、下流の川辺には、ベンケイガニ、クロベンケイガニがたくさんいます。河原には、今、トノサマバツタが飛んでいて、川辺の泥の場所にはアゲハチョウが水を吸いに来ます。

水辺といえばカワセミがいないといけません、鶴見川では源流から河口の干潟まで、一日座っている気だったらどこでも、一度や二度は、まず間違いなくカワセミに逢います。

生き物だらけの川だという認識を、是非持ってもらいたいと思います。本当かと思う方がいらしたら、大きな書店で、TRネット製作・販売の生き物ガイドブックが500円程度で手に入りますので、是非、手にしてください。

私たち鶴見川の市民団体は、行政と連携して、この都市河川に子どもたちを呼んで豊かな自然体験、学習をしてもらうため、安全な場所を整備する、魅力たっぷりの自然を確保する、そこに安心サポートを提供する、という3つのことに取り組んでいます。

安全、安心、そして魅力の3拍子そろった拠点が数十か所あるんですが、その中でも選りすぐった場所を拠点として、夏の間、スタンプラリーを実施しています。スタンプラリーのシートを持って子どもがそこに行って、ゴミ掃除を手伝うとか、勉強するとか、ただひたすら遊ぶとかすると、スタンプを押してもらえます。全部で20か所以上あり、2か所まわって、鶴見川流域センターに行くと、記念品が手渡されることになっています。

各地にある拠点で、一体、子どもが、どのような活動をしているのでしょうか。

例えば、神奈川県が整備した市が尾の水辺の広場では、小学生が50人、100人と学年単位で水の学習をしています。

また、新横浜では、鮎が遡上しますが、NPOによる安心サポート（ライフジャケット提供など）のもとに、小学生が学習しています。

鶴見川支流の早渕川と本流の合流点では、港北区の小学生が100人規模で「流れる水のはたらき」という理科の授業と魚とり体験をしています。インストラクターが付き添い、勉強できるシステムを作っています。

生麦河口のクリーンアップの活動も行っています。子どもや市民にとって魅力のある拠点で、行政と連携して、安全に整備され、安心サポートを提供されながら、様々な体験学習が進んでいます。

私たちのNPOでは、水辺安全確保のために、独自の「学習遊び安全ガイド」を作成しており、ホームページからダウンロードできるので、参考にしてください。安全安心の活動拠点の場所など基本的な水辺安全や観察会の実施のための情報を記載し、また、雷が鳴ったり雨が降り出す前に川から上がろうといった、命についての教育も記載しています。

私たちのNPOでは、大人も子どもも、都市河川の代表である鶴見川を歩いて、自然の魅力、汚染、治水、防災のことをわかってもらう活動をしています。横浜市と東京都が、共通の距離杭を500メートル間隔で、本川に打っていますが、これを頼りに流域を川沿いに歩くと、川、都市、地球のことがわかります。また、バクの流域として地図を販売したり、様々な企画をしています。なお一番の売れ筋は、鶴見川流域ウォーキングマップ「川歩き編」です。

私たちのNPOの活動にはいろいろな形で企業が参加しています。今年度の最大の参加企業は、トヨタ自動車、新車AQUA(アクア)のプロモーションとして、全国で水辺の活動を支援しています。そ

の全国モデルが鶴見川。この一環で、私たちのNPOでは、鶴見川源流で蛍が暮らせる水辺の再生活動を進めているものです。

鶴見川では、学習、自然観察イベント、ボランティア体験の機会が、たくさん用意されています。町田市、川崎市、横浜市に各々用意されていますので、是非ご利用ください。

この活動や体験の手がかりが次の2つです。

まず、小机駅徒歩7分のところに鶴見川流域センターがあります。そこに行けば、鶴見川全体のこと、自然から治水・災害の歴史まで、すべて理解できるようになっていて、市民活動のパンフレットなども置いてあります。

そして、私が代表理事をしているNPO鶴見川流域ネットワークのホームページです。膨大なイベント情報があるので、そこから楽しいイベントを検索できます。

汚いと今まで忌避されてきた都市河川の水辺に、実は子どもたちを中心に、市民を地球につなぐ壮大な実験が今進んでいるというお話をさせていただきました。ありがとうございました。

知事) ありがとうございました。これが鶴見川という驚き、まさに再発見です。次に行政の立場から、南足柄市長の加藤修平さんお願いします。

加藤) 南足柄市の加藤です。

南足柄市は、「水のさと かながわ」の水を生産している県西地域にあることを誇りとし、そのことを自負しております。隣接市町に小田原市や箱根町があります。南足柄市は金太郎のふるさとです。黒岩県知事は、神奈川といえば金太郎といつも話されており、金太郎をまちづくりの中核にしている南足柄市としては、大変ありがたく、フォローの風が吹いていると思っています。

南足柄市は、面積が約77平方キロメートルで、その約7割の52~53平方キロメートルが森林です。これは、海老名市の2倍、茅ヶ崎市の1.5倍に相当する面積です。水と緑の豊かなところであり、万葉の時代からの歴史文化を持っています。宝のような資源がたくさんあるところ、このようなイメージを南足柄市に持っていただくとありがたいと思っています。

南足柄市は、天与の自然の中で、美田の広がる良い場所で、先人が森林を守り、育み、継承し、農業も発展してきました。

豊かな水、清澄な水を求めて、富士写真フイルム株式会社、現在の富士フイルム株式会社が昭和9年に設立されました。南足柄市が発祥の企業であり、これも豊かな水の恵みのおかげです。

平成14年5月9日にアサヒビールの神奈川工場が南足柄市に竣工しました。約42ヘクタール、緑化率約5割の、素晴らしい環境を整えた工場であり、南関東一円に向けてスーパードライを生産しています。これも、先人が水、緑を育み、守り、支えてきた、自然の資源と人の力のおかげです。

富士フイルムを中心とした企業の繁栄とともに、南足柄市も発展してきました。昭和50年代には、市の財政力が全国で3~5本の指に入る時代もありましたが、現在は、厳しい状況にあります。

先ほどの岸先生のお話にあったような豊かな自然が、南足柄市にはたくさん残っており、住みやすい場所です。南足柄が発展してきた基盤、先人の苦労をもう一度見直そうと平成5年に「水のマスタープラン」を策定しました。政策として水を見直し、あらゆる事業の基盤は水や緑であるとして政策を展開してきました。「水のマスタープラン」では、豊かな水をこの地域にたくさん蓄え、どれだけの水量を生活用水、工業用水として使っていくのかという水の収支バランスをしっかりと考えよう、将来にわたって水を守っていくという基本的な考え方をしっかり持とうと、大きな政策テ

ーマとして取り組んできました。

そして、平成10年には「水資源の保全及び利用に関する条例」をつくり、「水資源保全利用基本計画」を策定して、市民、事業者、行政が一体となって、地域の水循環の健全な姿に配慮した総合的な水資源政策を推進してきました。その成果として、平成7年に林野庁から「全国水源の森百選」に、平成8年に国土庁から「全国水の郷百選」に選定されました。平成9年に国土庁から水資源功労者に、平成11年に第1回日本水大賞奨励賞に選ばれました。さらに、湧き水が日量1万3千トンである「清左衛門地獄池」が、平成20年に環境省から「平成の名水百選」に認定されました。

私たちは豊かな自然環境を守っていこうと「豊水会」というボランティア団体を地域のリーダーの下に結集して、美しく豊かな自然を心の故郷として、花、水、緑を愛して自然環境を守るための奉仕活動を行っています。河川の堤防の草刈り、富士フイルム神奈川工場の近くで3月中旬頃に咲く「春めき」という桜の花を守る活動を展開しています。行政、市民ともに、南足柄の大切な資源とは何かということDNAが覚えているところが、人の力であり地域の力であると思っています。

一方で酒匂川を始めとした水との戦い、宝永の大地震、富士山の噴火があったことで、大変な艱難辛苦（かんなんしんく）の時代がありました。当時、多くの人が村にとどまり降り積もった火山灰を取り除き、酒匂川の氾濫から地域を守り、復旧・復興させました。先人に感謝をし、自然の恵み、水の恵みに感謝しなければいけないと思っております。

ありがとうございました。

知事) ありがとうございました。確かに、水は恩恵だけでなく艱難辛苦（かんなんしんく）を与える面もあります。そういうことを乗り越えながら、水を中心としたまちづくりを進めてこられたんだということがよく分かりました。それでは続きまして、桂川・相模川流域協議会代表幹事をお務めであります倉橋満知子さん、お願いします。

倉橋) 桂川・相模川流域協議会の倉橋と申します。

桂川・相模川流域協議会は、神奈川県民の飲み水である桂川・相模川の水質と水量を保全する活動を行っている団体です。神奈川県民の6割が相模川から水を取水していますが、相模川の水の8割は山梨県からきています。富士山に降った雨が伏流水となって湧き出ている富士五湖の一番標高の高い山中湖、ここが相模川の源流です。相模川の源流が山中湖と知っている方が意外と少なく、相模湖と思っている方が多いです。横浜市、川崎市の方なども、この相模川の水を飲んでいるんですけども、横浜市だと道志の水だとか、それから川崎市は多摩川の水だとか飲んでいると思っいる方もかなり多いと聞いています。この流域マップを見ていただきますと、相模川も酒匂川も富士山からの水が元々源流になっていて、「水のさと かながわ」は、富士山からの恩恵をもらっていると思っています。私は、子どもの頃は横須賀に住んでいて、子ども心に夏になりますと水が冷たくて大変おいしいと感じた思い出があります。母から「この水は富士山からの水だからおいしいのよ」と教わって、なるほど富士山からの水だからおいしいんだと思っいたのですけれども、今は水道水をひねって飲んでみても、子どもの頃のおいしさというのはちょっと感じないかなと思っしております。それが私の活動している原点でもあります。

続きまして流域協議会が、どんな活動をしているか、簡単に説明します。

まず、流域を通じて全体でクリーンキャンペーンをして、流域市町村や市民団体、海岸を含めて、毎年3万人余りの方々に協力をいただいています。ここ数年は豪雨が非常に多くなっいて、

ダムや海岸に打ちよせられるゴミが甚大な量でして、ダムには山からの丸太類が多く、また、海岸に打ちあげられる7割のゴミは川からのゴミだそうです。ゴミの問題はなかなか解決していかないというのが現状です。

そして、環境調査をテーマを決めて2年毎に実施し、調査結果に基づき提言をしています。ホテルの生息調査、シジミ調査、魚道の調査、田んぼの生き物調査、外来植物の調査、そして今は、アメリカザリガニの調査を始めています。シジミ調査などは、高校の生徒と一緒に、相模川、桂川、山梨県まで行い、この結果は、この流域には真シジミと言われる在来のシジミは1か所しかなく、あとはタイワンシジミという外来シジミでした。田んぼの生き物調査をした結果、農業や水路整備が生き物にどんな影響を与えるか把握できました。外来植物調査では、相模川の河原にシナダレスズメガヤというアフリカ原産の植物が非常に蔓延していて、在来植物が駆逐されて危機的な状況に至っているのがわかり、対策として、外来植物を取り除いて、絶滅危惧種になっていますカワラノギクの再生・保全に取り組んでいます。

さらに、上流部の山梨県の課題にも神奈川県民としても協力しています。先ほど言ったように、山梨県から相模川の8割の水が入ってきていますが、その水を育てている広大な森林が非常に荒れています。山から木が切り出されず、手入れをされない森がたくさんあるため、山に豪雨があるたびに木が流れ出すということになってしまう訳です。下流の神奈川では、この山梨の木を使ってあげることがとても大切です。山梨県の人口は非常に少なく、この流域には20万人ぐらいしか住んでおりません。下流の600万人近い人達が、その水の恩恵を受けているわけですから、家を建てるときにはできるだけ山梨県の木を使うなど、何か恩返しができるとういことです。

これで流域協議会の説明を終わりますが、私は相模原市内の地域でも「鳩川・縄文の谷戸の会」を発足させ、環境保全の活動をしています。相模原市・海老名市・座間市を流れている相模川の支流である鳩川は、川というより都市排水路の位置づけで、20年以上前はどぶ川で臭いがひどい川でした。このどぶ川の水を結果的に飲んでいと思うと非常にショックで浄水器をすぐに使い、お茶ぐらひはせめておいしい水で飲みたいと思ひまして、山まで汲みに行ったりしておりました。しかし、水は汚いのですが河畔林や周辺の自然環境が豊かですばらしい環境で、その自然環境をこどもたちのため、他の生きもののためにも残していかなければいけないと感じました。縄文の谷戸は、湧水、水辺環境が非常に豊かで、もともと湧水を使った田んぼでしたが、相模原市が公園予定地として買い上げていくうちに休耕田になっていきました。15年ほど前に公民館活動でこの田んぼで米作りをする機会があり、休耕田ではなく田んぼを耕作していったほうが生態系が保たれると考え、それがきっかけでその後も田んぼを耕作することになり、「鳩川・縄文の谷戸の会」と名前をつけて活動することになりました。市には、生態系のためにも田んぼを取り入れた自然公園にしてほしいと提案をずっとしています。この15年間の間には、周辺がすっかり変わってしまって畑や林、屋敷林なども無くなってしまい、5.6ヘクタールの小さな公園ですが、島のように取り残されてしまっています。ただ、この中には広い原っぱや斜面林、湧水、川、河畔林と変化にとんだ水辺環境が存在していますので、それらの生態系を維持していくためにも手入れ作業が必要ですし、田んぼや畑の農作業が最適だと思っています。現在、会員で農作業をしながら市のアダプト制度を利用して草刈りや周辺の手入れをし、年間を通じて田植えやホテル観察会そして稲刈り、収穫祭、野草のてんぷら会などをイベントとして行っています。会員は若いファミリーや中高年の夫婦など家族ぐるみが多く、最近では、外国人の参加も多くなりまして、都市部に残された貴重な水辺環境が子どもから大人まで大変魅力を持っているのではないかと感じているところです。

知事) ありがとうございます。神奈川には、まだまだ発見するべきことがいっぱいあると思いました。それでは、最後に鈴廣かまぼこ株式会社代表取締役 鈴木さん、お願いします。

鈴木) 鈴木です。よろしくお願いします。

私は、かまぼこ屋ですが、小田原の環境のプロジェクトにもいろいろ関わっていて、今、ブリが帰ってくる森を作ろうとか、小田原の木を切って東北の復興支援に使ってもらおうと「報徳の森プロジェクト」に関わっています。

小田原のかまぼこは、良い水、すばらしい地下水があるから良いかまぼこができることをPRさせていただきます。

昭和23年に米軍が空撮をした写真を見ると、酒匂川の河口と早川の河口がありますが、海に扇状に水が広がっているのが見えます。皆さん、これは何だと思いませんか？これは川の真水が海に広がっているのです。川の水というのは、あっという間に海に混ざって塩水が薄まってしまうと思っているかもしれませんが、川の水は、比重の重い塩水とは簡単に混ざらず、扇状に何百mも沖まで広がって行く訳です。これが魚にとって大切な、淡水と海水の真ん中である「汽水」と呼ばれるものです。この汽水域が広がれば広がるほど植物性プランクトンが増え、そして動物性プランクトンが増え、小魚が増え、大魚が来る豊かな海になります。昔は汽水が小田原の沖に広がっておりまして、豊かな海の資源を育ててくれています。今はこのような汽水の広がりは見えないでしょう。

2009年に大雨があったときに、酒匂川の一番下流にある橋に根っこごと木が引っかかかっていました。上流の南足柄やら山北やらから流れてきた木が引っかかかっていたわけですが、根っこごと抜けて流れ着いている。昔はこんなことはなく、森の手入れが進んでいないために、根っこが浮き上がって、大雨が降ると根こそぎ流れてくるのが最近の県西地区の森の実態でして、この木が私達に警鐘を鳴らしていると思っています。

小田原の浜ですが、昭和の30年代、40年代前半ぐらいまでは、砂浜が100メートル200メートルありました。そして夏には海水浴で賑わう楽しい浜でした。ところが、今の小田原の浜は、石がゴロゴロで砂がほとんどありません。西湘バイパスができて、飯泉の取水堰ができて、三保ダムができてという昭和40年の後半から急速に石だらけの状態になって、今に至っております。何年か前に西湘バイパスの二宮で、大波によって道路が半分削られて、未だに補修工事をしてはいますが、砂浜が100メートル200メートルあれば、大波なんかそこで消えてしまい、何も危ないことはないのです。山から自然に、ある程度のペースで砂を運んできてくれていた水、この水がどこにいつってしまったのだらうと思うわけです。

小田原の海産物と言いますと、アジというイメージを持っている方が多いんですが、実はブリなんです。私が子どものころ、昭和20年代、30年代までは、1日に一網に2万本とかかかることもあり、1シーズンで50万本にもなりました。今、北陸の氷見がブリで有名になりましたが、せいぜい10万本か15万本ですから大したことありません。小田原では、今年あたり少し戻ってきて3万本くらい揚がっているようですが、それでも随分変わってしまいました。ブリというのは大変神経質な魚だそうで、音や光があると近寄ってこないんです。それから汽水が大好きで、真水がたくさんあると餌がたくさんあるのがわかるので、岸に近寄ってきます。今は、真水が少なく、そして人の音や光がブリに警戒心を起こして近寄ってこないようです。そんなことから、森を手入れして、水をたっぷり川に流して、ブリが自然環境をつくる「ブリの森づくりプロジェクト」を今小田原で始め

つつあります。

森を手入れし、海が良くなるという、森と海の循環がすごく大切ですけれど、やはり森に手を入れるためには、経済が回っていかねばいけない。林業が回らないと漁業が立ち行かなくなるわけで、林業と漁業を上手に回して、森にお金がちゃんと入ることでよい森ができて、また海が豊かになっていくことを踏まえて商売するのが、私たちの役目かなと思っています。その一例として、今始めた試みを一つだけご紹介します。新しいかまぼこを小田原のかまぼこの組合員10数社で共同開発して、来年あたり新発売したいと考えています。小田原にたくさんある杉の間伐材を蒲鉾の板にして、地元のアジやカマスやサバなどを材料にして、少し黒っぽいかまぼこになりますけれども、森と海をつないだ本当の地元産のかまぼこを作ろうという試みです。林業と漁業が少しでもうまくまわって、森に手が入るような、経済的な効果が得られればいいという一例でございます。

行政も今までの反省をして、新しい治水行政というのも考えて、また民間も大いに森や川の手入れに勤しむようにして、汽水域が広がる海に戻して、みんながまた豊かに暮らせるようになったらいいとの思いを持っています。

知事) ありがとうございます。確かに、森の再生からブリのやってくるまちへと、森、川、海、全部つながっているということですね。水という視点でいろんなものが見えてきます。加藤市長のお話にもありましたが、水というのは牙をむいてくることがあり、川があふれ、大災害になることだってあります。その水の自然のおそろしさということをうまくコントロールしていくと同時に、その水の楽しさ、魅力というものを際立てていく、この辺のバランスが難しいところです。岸さん、どうでしょうか。今、神奈川では、うまくいってる方でしょうか。

岸) なかなか実情は掴みきれませんが、子どもたちが水辺で魚とったり蟹とったりして楽しい体験をする現場と一緒にいる保護者や教員に治水の問題とか汚染の問題をお話しますと、非常に効率よく地域社会に入っていきます。我々は「一六（いちろく）の法則」と言っていますが、子ども1人が川辺に来ると、両親におじいちゃんおばあちゃんと、6人ほどの大人がくっついて来る可能性があります。子どもが蟹や魚をとって大喜びしてるときに、脇で一緒に治水の話、汚染の話をする、広がるんです。子どもの相手をするのと、地域に防災の意識を広げることというのは見事にカップリングしまして、子どもが遊んでいる現場でつながるんです。全県的には、まだ、そういうところにまでいってないかもしれないと思います。

知事) 確かに治水を優先したり、防災を優先したり、としたら何の味気もなくなってしまう。でも、その楽しさということを知りながらであればうまくいく。

岸) 河川管理者が子どものイベントを応援するのを無駄だと思ってしまうと、大人たちも汚くて怖い川へは行きませんので、治水も環境も勉強していただく機会がない。ところが汚くて怖い川と思っているところで子どもがミミズやハゼをつかまえて大喜びしている現場に同席すると大人の意識が変わる、治水や環境問題にもちゃんと関心が広がるんです。

知事) 倉橋さん、このあたりいかがですか。

倉橋) 私の活動は流域が広いものですから、地域ごとでいろんな活動をしていまして、例えば海に近い湘南地域は海を中心にやったり、相模原市でしたら相模川の中流域で保全活動をしたりしていますが、川が大きいこともあって、もっと知ってもらいたいと思いつてもなかなかうまく広がっていかないというのが課題です

知事) 鈴木さん、森と川と海と一体となった形で進めていかなければいけないというときに、一番弊害、壁となっているものは何でしょうか。

鈴木) 様々に壁はあるのかもしれませんが。あまり楽しい話ではありませんけども、水利権がいろいろ弊害になっていることが多いようです。いろいろな水の利用方法についても、本来はこの水は海にそのまま流してもらいたいと思っても、やはり水利権があるために、汲みやすいところから汲んでしまうというようなことがあって、どうしても自然の摂理とは反するような取水の方法とルートができてしまい、非常に見ていて歯がゆいところです。

知事) いろんな分野が一体となって取り組んでいくというのは、担当が全部分かれている今の行政の仕組みの中で一番弱い部分ではないかと思いましたが、加藤さん、その弊害というのは感じられませんか。

加藤) 基本的なところに目を向けますと、全ての営みの源はやはり第一次産業である農業であり、林業であり、漁業であります。こうした自然をともしたなりわいが、バランスをとりながら、健全なかたちであるということが、大事であると思っています。行政や政治の役割は調整ですが、できるだけ縦割りの物の考え方ではなくて、縦糸横糸をもっと織りなしていく、原点に立ち返るような形で物事を進めていく、そうした視点を大事にして取り組みをしているところです。

知事) 岸さんが先ほどおっしゃったような、子どもたちが川辺でにぎわいというか喜びを感じる、楽しさを感じるというような話と、治水のような話といったような、異なるジャンルがあり、担当部局が違うときに一つの方向に向けて取り組みが進められるかという問題、壁を肌で感じたことはありますか。

岸) 年中感じながら過ごしています。やはり雨の水が集まる範囲である‘流域’というものを持ち出さないとだめで、その枠組みで水の動きに注目しながら、産業のことも防災のことも考える必要があります。行政なり大人たちが暮らしの中で、私は‘テーマ化’と言うのですが、物を考えるときのテーマにするときの概念として‘流域’を使います。子どもたちは流域なんてことを何も知らなくても、川で楽しく安全に遊んでいると、そこに形成される流域の磁場のような場で行政とか大人たちがつながって、治水や環境への関心が地域に広がっていくんだろうと思っています。鶴見川の場合、流域センターという施設があり、大人たちが「鶴見川の治水って町田、川崎、横浜が関係あるのか」とそこで学ぶということがある。思い切って流域という枠組みを表に出すというのが行政の施策としても必要です。四全総（第四次全国総合開発計画）のときに流域というのを地域的諸施策の統合の場として位置付けたことがあるのですが、活用されていませんね。神奈川県

中を流域に分けて、流域ごとに自然のこと、防災のこと、産業のことを考えるという展開が未来の方向だと思います。子どもとセットで大人が問題に関わり、楽しい場でエネルギーができてきて、そのエネルギーで進むような問題であると思っています。

知事) 倉橋さん、流域という概念、これは大事だと思われませんか。

倉橋) それはとても大事です。先ほど話しましたように神奈川県の水は丹沢だけではなく、山梨の方から圧倒的に入ってきているということが意外と知られていません。今、水源環境保全税の中で上流側対策という項目があります。今まで5年間は実施されなかったのですが、今年度からやっと上流部に税金を使って森の整備と水質保全のため、下水道処理施設のリンを固化して取るということが始まったところです。山梨県と連携していくということで、私たちは15年近くこの流域協議会をやっていますが、第一歩を踏み出したかなというところです。課題や問題が多いとわかっているけれども何もできないというのが現状でしたから、流域という概念はとても大事で、上下の中でお互いに問題解決していく方法をこれからはとり続けていかないと、水の問題というのは解決していかないとと思います。

知事) 鈴木さん、森・川・海の連動というのはまさに流域全体の話ですよ。

鈴木) 先ほど知事から障害という話がありましたが、せっきく森と海が水でつながっているのに行政はつながっていないのではないかという経験をします。流木が流れてきたときも、漁業組合が、網に入ってしまったてどうしようもないと河川管理の当局に訴えると、山から流れてきているんだから山の管理だよというように回されたりして、全体としてはっきりした動きを誰に対しても取りにくいことがよくあります。

知事) このパネルディスカッションを受けて、南足柄市をこんなふうにしていきたい、神奈川を「水のさと」にしていくためにこんなふうにしたいということなど、最後にご提言いただきたいと思えます。

加藤) 第一次産業、第二次産業、第三次産業すべてに垣根がなく、あらゆる産業が自然と共生するような形が望ましいと考えます。県西地域はそうした資源をたくさん持っているところで、先ほど鈴木さんもおっしゃっていたことに通じますが、「森は海の恋人」と言うように、森と海があってその間には水と川があります。そういう意味合いで、すべての人が同じような思いを持って生活の基盤を考えるという方向でまちづくり、地域づくりを進めていくことが大切であると考えます。第一次産業、第二次産業、第三次産業が均衡ある形で発展していくという方向を目指したいと思えます。

知事) 「水の魅力でまちを元気に」をテーマに議論してきましたが、私の持っている思いが、皆さんの議論の中で浮かび上がってきたと感じています。なぜ「水のさと かながわ」という打ち出しをあえてしたかということ。もともと私がなぜ「いのち」、ひらがなで書いた「いのち」という言葉にこだわり続けているかということともつながっています。いのち輝くためには何をすればいいのかということ、いろいろなアプローチがあります。医療体制が完璧になればいのちが輝きますか。

それだけではなく環境の問題も大事ですよ。住宅環境の問題もエネルギーの問題も農業の問題もみんな関係しています。これが一体となって動いていかなくてはいけないだろうという意味で、いのち輝くと言っていたのです。「水のさと かながわ」も同じことで、皆さんにお配りした「水のさと かながわ」のパンフレットを見ていただくと、水づくしでいろいろなことが出ていますが、行政では全部担当部局が違うのです。担当部局が違うから自分のところの話じゃないと言っているのはだめで、「水のさと」ということで、自分の部局を越えて、一つの魅力づくりに向き合っているのではないかということです。そのためには防災という観点から入ってくる部局もあるでしょうし、教育だとかスポーツというアプローチをするところもあるだろうし、観光として盛り立てていこうというところもあるだろうし、食の文化だというアプローチをするところもあるだろうし、「水のさと かながわ」の魅力が出てくるのは、これらのさまざまな部局が一つの方向を向いて、一体となって動くということ、それが一番大事なことだと思っているところであります。神奈川は挑戦をしてみたいというのが、こういう打ち出し方になったのです。今日の皆さんの議論の中で、そういう思いがさまざまに出てきたとあらためて感じました。今日頂いたことをしっかりと胸に受け止めながらこれからの神奈川県政を進めてまいりたいと思います。

今日は長い時間お付き合いいただきまして、ありがとうございました。